

訪問日：2017.9.6 / エリア：京都

劇団 衛星



回答者 蓮行さん(劇団衛星代表)

演劇ワークショップ活動と協働パートナーについて

茨木市や高槻市と組んで小学校での演劇のワークショップをしてきました。児童館や小学校であれば、安全教育に関わることもあります。警察官が来て、犯罪について話すことも必要ですが、それだけではとにかく怖いイメージだけになってしまいます。安全教育は実は難しい。私たちは演劇でストーリー化し、職員さんや先生も巻き込みます。すると盛り上がるし、危ない場面で、ここがダメなんだ、こういうふうな流れが危ないんだということを具体的に理解してもらえます。その後、実際にその場面を子ども自身が演じてみる、議論を促すワークショップを実施することもあります。

現在はデイサービスで高齢者の方と演劇ワークショップをすることも進めています。認知症の進行を遅らせ、スタッフの介護負担が減るのではと考えていて、研究者と組んで経済や教育、心理、医療の観点から調査を実施しています。デイサービスでの演劇ワークショップでは、子どもやスタッフ以外の大人が参加することで、介護する側、される側でない関係が生まれる、まさに包摂的な活動になることが見えてきています。高齢者は介護される人という役割から離れて、新たな役割を担うことができます。子どもにとっては、自分の祖父母以外の人に会い、関わることをまず体験してもらえます。

演劇に関わる仕事は、何か困ったことがあり、いい手はないかと考えている人や、人間の仕組みを知ろうとして、演劇に興味を持ってくれた人と組むことが多いです。演劇ワークショップという手法があることを伝えて、何か一緒に出来ることを考え、実施に至っています。例えば、ロボット工学(ロボティクス)などでは、何とか人間らしい自然な動きを出そうと計算で試みても、なかなかうまくいきません。そこで演劇やパントマイムをやっている人が、どのように見せれば人間らしく、相手にその動作が伝わるの

かをアドバイスすると役立つことがあります。そういうものを組み合わせながらロボティクス演劇祭というものを実施して、一般の人にロボティクスとは何かということを知らせるイベントを実施したこともあります。

演劇というアートの捉え方

市民にとって芸術は必要という考えは、文化芸術振興基本法などのおかげで、一般化してきました。ただ演劇という分野に関しては、戦後に殲滅させられた歴史があります。それによって、主にコミュニケーション、合意形成の訓練をする過程が失われたといっているでしょう。演劇は一方で、他文化・異文化の相互理解を促すもの。演劇をする・観ることで劇中に出てきた外国のものを理解するというのももちろんあります。

他方で、演劇はコミュニケーションしている二人の人間を見せ、二人の関係を観客に分からせることが必要になる芸術です。そのために演出家という、関係性を俯瞰する第三者の視点を常に持っています。演出家自身だけでなく、俳優もそれがある程度分かって演じています。

特徴によって役割配置をして、ドラマ化し、コンパクトに事象を理解して、人に伝える。こういった、できごとをメタ化する作業は、実は子どもでもしているし、理解はできます。理屈としては後で理解できればいいから、演出家の視点、メタ化してコミュニケーションがどのように起こっているかを理解する力を身につけることが、そのままコミュニケーションの場を作り出すことにつながっていきます。コミュニケーションの問題というのは夫婦での会話や子どもと大人の会話などでも起こりえますが、日常でうまくいかないと深刻な問題になります。コミュニケーションの場を作り出すということが演劇の社会的な機能だと思います。

小劇場業界における非常に珍しい専門演劇人集団として、表現活動を行うほか、演劇のポテンシャルを利用したワークショップを全国各地の学校や高齢者施設で展開している。小学校の主要教科に演劇を取り入れた指導や環境・防災・防犯・食育などを学ぶ演劇のワークショップを多数実施している。

〒600-8445
京都市下京区岩戸山町 440
江村ビル3F
TEL/FAX: 075-353-1660

地域とのつながり

吹田メイシアターなどの劇場と地域と大学が連携した市民劇を、プロの演出家・劇作家と一緒に作るということをしてきました。端的な目的は市民の活性化ということです。まず、高度な芸術を享受できる場所を、市の中に設定することによって。次に、劇を作る中で市の歴史や観光資源などを掘り返すことによって。第三に、演劇創作を通じて地域に関わり、地域への愛着が生まれることによって。このように地域と連携することで、市民を活性化する芸術の役割を示してきたと思っています。

を取り合うかではなく、お互いに利益の部分が違って、実は組み合わせればお互いに満足できる状況になるかもしれないです。

行政への提案

双方向性の対話の機会を作ってほしいと思います。今回の調査のように聞きに来てくれたり、こちらから話をしたり、相談ができるいい方法を作り出してほしいです。行政は、市民活動に貢献する役割を担っているのだから、税金や振り分けられた予算を自分のものという勘違いをしないでほしいです。

演劇ワークショップで看護師さんや実習生などのコミュニケーション改善のワークショップの依頼を受けた時によく思うのですが、同業者だけで集まって、コミュニケーションを改善していくためにどうするかを考えても、いい案が出るはずがないと思います。むしろ多様な人と出会うための仕掛けが必要です。

福祉、文化芸術、教育など行政の中でどこかに予算が付けば、どこかは減ります。それぞれが競合しているのはどうしようもないでしょう。福祉、文化芸術、教育にそれぞれ関わっている人と行政マンが、お互いに抱えているコンフリクトをどのように解決するかということをいきなり話し合うのではなく、どうやって多様な人が集まれるか、どうやってソフトに話ができるかを考えてみたらどうですか。仲良くなるのがポイントだと思います。対話を試みようという気持ちになれば、何パーセントの利益